

本発表では、タイの新興寺院タンマガーイ寺の活動を主たる対象とし、その近代的な組織運営と外国布教の様子についての紹介と考察を行なう。タンマガーイ寺は1970年に活動を開始し、1977年に正式な寺院として国家から認証されたタイ上座仏教サンガに所属する寺院である。その意味では新宗教と呼ぶことは難しい。しかしこの団体は、上座仏教の中でも極めて特殊な瞑想実践と涅槃思想を有しており、その点を加味するとむしろタイ上座仏教内の内棲型教団と言えるだろう。

タンマガーイ寺の瞑想実践は、上座仏教の主流派が行なうような呼吸や身心の諸感覚などへの集中・観察に基づく瞑想実践ではなく、実践者の身心の内奥に光り輝く球や内なる法の身体（タンマガーイ）を観る瞑想により、独自の解釈に基づく涅槃に達することが目的とされている。またこのような神秘的体験を伴う瞑想実践は、現世利益をもたらすものとも考えられている。

信徒の多くは高学歴の都市新中間層であるが、最近では比較的学歴の低い都市民や地方村落にも信徒を獲得しつつある。この団体は、布教方法において、大規模宗教施設におけるイベント的儀礼や、ITやマスメディアの利用などをタイではいち早く取り入れている。一方で、これらの活動を支える寄進活動にも積極的であり、様々な寄進対象物品が逐次開発されている。この点について、消費主義を肯定した宗教活動だとの批判も見られるが、事態はもう少し複雑であり、むしろ消費の聖化という点から理解すべき事柄かと考えられる。

タンマガーイ寺の最初の外国支部は1992年に設立されている。思想や実践の特殊性からタイ国内ではこの寺の活動に反発する者も多いため、外国への布教は彼らにとって重要な戦略とされている。また教団運営のやり方を日本の新宗教から学んでいる点や、教学の構築に際しても諸外国の大学における仏教研究の成果を取り入れようとしている点など、タイでの教団構築自体がグローバル化の中で行なわれてきた。

現在、タンマガーイ寺は、20カ国以上の国に支部を有している。日本にも7つの支部があり、宗教法人タイ国タンマガーイ寺院日本別院として活動を行なっている。主として在日タイ人を中心に信徒して活